



高橋さんの畑で大切に作られた「ほうれん草」を陳列する齊藤由紀さん(24)。障がいを感じさせることなく、店内を車いすで機敏に動き回る。元気いっぱいの笑顔が素敵だ。

①収穫したほうれん草の土を除去し、出荷できるように整える。
②長ネギを収穫。足場がやわらかい土のため、体への負担は思いのほか大きい。③④長ネギの種を優しく丁寧に植えていく。



三 芳 町
×
ト カ イ ナ カ

農 業
×
福 祉

農業と福祉の連携を都市近郊型農園で実現

能力を「農力」に変える。

農業を障がい者支援に繋げる「農業と福祉の連携」。すでに三芳町内の農家で行われています。三芳町の魅力と障がい者の個性を活かしたこの取り組みのキーワードは「農力」でした。



上富で農業を営む高橋充則さん(一番右)と障がいのある従業員の3人。種から愛情を込めて育てた自慢のネギを収穫し、トラックに詰め込んでいく。

開放的な空間が、心のケアになっている。



野菜販売所「ぶんぶん」

高橋充則さんと従業員が育てた野菜は、野菜販売所「ぶんぶん」で売られています。ここで働く従業員は障がいのある人たち。陳列されているほとんどが、ここで働く皆さん自身が生産した野菜です。障がい者が活躍できる場を広く提供し、店内は車いすが通れる、バリアフリー構造。誰でもゆったり、商品を見られる工夫がされています。



▶高橋さんの畑で朝採りされた「ほうれん草」を手にする従業員たち。

住所：所沢市中新井 1-134-15 ☎：04-2942-3600

「町」、トカイナカ三芳町の魅力だと高橋さんは言います。「都会で暮らす障がい者が、農業に携わりたいと考えた時、遠い地方まで行くイメージが強いですが、三芳町は池袋から最寄りの鶴瀬駅まで30分足らず。電車通勤で農業が出来るなんて素敵だと思いませんか」
都会とは異なり、雑音がない環境は、心身の大きなプラスに。「開放的な空間で落ち着いて作業できるほか、畑での作業は思っている以上に体に負担がかりません。適度な疲労は安眠に繋がり、心身ともに好影響な

「5年前に父を亡くし、途方に暮れていました。障がい者の力がなければ、今の自分はいません」と言う高橋さん。「農業と福祉の連携は、障がい者の個性や特技を活かした自立に繋がり、農家の後継者不足解消の手段の一つになります。個々の能力を『農力』に変え、地域の生産力を向上させたいです」と父が遺した広大な畑で、青空を見上げ、微笑みました。

農福連携は後継者不足解消手段となる

今、注目されている「農」と福祉の連携プロジェクト

進まない障がい者雇用や農家の高齢化・後継者不足・耕作放棄地の拡大などを背景に、障がい者の就労機会を農業で作る「農福連携」が注目されています。「将来的に、私の畑で働いた人たちが、派遣従業員としてほかの農園で働くことができれば」と高橋さんは話します。障がい者のチカラが輝き始めています。

■障がい区別の就労の現状

区分	人数	雇用数	就労割合
身体	3,937,000	313,000	9.4%
知的	741,000	90,000	13.3%
精神	3,201,000	28,000	0.89%

参考：厚生労働省 平成 27 年度障害者白書から



朝

採りされた野菜が並ぶ野菜販売店。ここで売られている

三芳町の野菜は、上富で農業を営む高橋充則さん(30)の畑で障がい者が育てたものです。高橋さんの指導のもと、知的障がい、精神障がいのある3人が最低賃金を保障する雇用契約を結び、従業員として高橋さんの農園で働いています。

特別扱いはしない

「障がい者だからと言って特別扱いはしません。畑の『お手伝い』ではなく、しっかりと仕事として働いてもらっています」と話す高橋さん。従業員はどんな仕事をしているのでしょうか。

「見てみますか?」と案内された作業場では、出荷を待ちわびる、山積みされた「ほうれん草」の土を慣れた手つきで除去していました。「私たちが単調ですぐに飽きてしまう作業も、彼らは集中して、真剣に取り組んでいるんですよ」

都心に近い三芳町は大きな魅力

従業員は都内から電車通勤。これこそ日本一東京から近い